参考資料１

指導救命士テキスト
【骨子版】

平成 26 年度

救急業務のあり方に関する検討会

救急救命士ワーキンググループ

スキル	科目	研修科目
知識	1　医学と教育	救急隊員のための医学概論

ねらい	指導的立場の救急救命士（指導救命士）として、医学を継続して学ぶ姿勢やその必要性については、誰よりも深く理解をしていなければならない。救急活動において必要となる医学知識を整理して、救急業務に携わる職員に対し、その職務上で必要となる医学知識を理解させることに重点をおいた教育の方法を理解する。
到達目標	指導救命士として、医学を学ぶ必要性や姿勢について、幅広い知識を身につけるとともに、医学知識を任務（救急隊員、消防隊員、救助隊員、通信指令員）に応じて区分することができる。
ポイント	✓　医の倫理について説明できる。 ✓　役割に応じた医学知識について理解させることができる。 ✓　救急隊員が生涯学習をする必要性について説明できる。
概要	**（１）医療に携わるものとしての倫理について** 厚生労働大臣の免許を受けて業を行う救急救命士は、医療に携わる者として医の倫理を理解しておかなければならない。指導救命士は、なぜ医学的知識や処置、救急活動と合わせ、「生命倫理に関する原則」を医療職が理解していなければならないかを説明できなければならない。 **（２）医学用語の持つ役割** 救急隊員にとっての医学用語は、医療資格を持つ多職種との関係、他の活動隊との関係、隊員との関係で、限られた時間の中で限られた伝達ツールを用いて情報伝達をする際に、効率よく行うための大きな役割を担う。 **（３）救急隊員に求められる医学知識** 指導救命士は、医療機関内で行われる医療とは異なる救急活動の特徴を理解した上で、救急活動の水準とされる医学知識、救急活動に反映させるための医学知識を学ぶ必要がある。 **（４）救急業務に携わる職員に求められる医学知識** 指導救命士は、消防隊員、救助隊員、通信指令員のそれぞれについて、知っておいてほしい医学知識とは何かを理解している必要がある。 **（５）生涯学習の必要性について** 救急業務に携わる職員は、継続的に知識、技術の維持、向上に努めていく必要があり、そして、公務員として市民の期待に応えるために、職員各々が自覚して積極的に生涯学習に取り組んでいかなければならない。

スキル	科目	研修科目
知識	２　消防行政	救急業務と関係法令

ねらい	救急業務は、消防関係の法令のみではなく、その他多くの法令や通知等に基づき実施されている。これらの関係法令を遵守し救急活動することにより、救急隊員、傷病者、関係者等が相互に守られることを、指導救命士は理解しておかなければならない。
到達目標	指導救命士として、特に救急業務に関する消防組織法、消防法、関係法令、救急業務に関する通知などについて、幅広い知識を身につける。
ポイント	✓　関係法令や通知が救急業務の「どこで、どのように」作用しているのか、その関係を説明できる。 ✓　関係法令や通知の関連性を説明できる。
概要	**（１）救急業務に携わる者が理解しておかなければならない関係法令** 救急業務に携わる者が理解しておかなければならない関係法令として、まず、救急業務の変遷と法令、救急救命士制度、救急業務と救急隊に関する法令がある。 また、救急現場での活動でも、出動から傷病者接触までの間、傷病者接触から観察と処置までの間、適応する医療機関の選定から病院到着までの間と、各段階において「感染者の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律」、医師法、保健師助産師看護師法といった関係する法令やそれに伴い理解しておく必要のある事項がある。 **（２）法令を守るということ** 救急業務は、特に救急救命士の運用が始まってから、多くの関係者の尽力により、法改正や要綱、基盤の整備、プロトコルや活動マニュアルの策定等が急速に発展してきた。指導救命士は、自らが関係法令の知識を理解するだけではなく、救急隊員にそれらの知識を、アウトプットしなければならない。 指導救命士や救急救命士を含む救急隊員は、関係法令やプロトコルに守られ、さらに、活動上においてプロトコルに従うことで、自らを守っているということを今一度理解しておく必要がある。

スキル	科目	研修科目
知識	3　救急実務	消防組織とメディカルコントロール

ねらい	メディカルコントロール体制の充実や消防と医療との連携の強化により、救急活動の医学的な質が保障され、地域住民に対して安心・安全な病院前救護が提供できるのである。 指導救命士は、消防機関と地域メディカルコントロール協議会との関係及び各々の役割を熟知しておかなければならない。
到達目標	消防機関と地域メディカルコントロール協議会との関係及び役割について指導することができる。
ポイント	✓　メディカルコントロールの必要性が指導できる。 ✓　消防機関とメディカルコントロールの関係が指導できる。 ✓　メディカルコントロールの役割が指導できる。
概要	**（１）消防組織とメディカルコントロールの関係** 救急救命士の行う「救急救命処置」はあくまでも「診療の補助」であり、医師の指示に基づいて行われるものである。したがってメディカルコントロール体制の充実が、病院前救護の質を向上させるための重要な要素となっている。 消防組織と各地域のメディカルコントロール協議会との関係は、それぞれの地域における救急に係る諸問題について恒常的に協議する場であり、消防組織と各地域のメディカルコントロール協議会は常に緊密でなくてはならない。 消防機関と地域メディカルコントロール協議会が常に緊密な連携をとるうえで、消防組織内でのキーパーソンのひとりとなるのが指導救命士である。 指導救命士は、メディカルコントロールの意義を深く理解し、消防組織と各メディカルコントロール協議会との調整役を努めなければならない。 **（２）地域メディカルコントロール協議会の役割** 地域メディカルコントロール協議会の役割は多岐にわたるが、主な役割としては、メディカルコントロール体制と PDCA サイクル、常時指示・助言体制、事後検証、研究・教育、プロトコルの策定・改訂、傷病者の搬送と受け入れの検証等がある。

スキル	科目	研修科目
知識	３　救急実務	救急隊長要務

ねらい	救急活動を統括する救急隊長は、救急隊の運用管理、傷病者管理をはじめ数多くの役割を持っているが、全てが思い通りに行くとは限らない。特にアクシデント発生時の対応は、慎重に進める必要があり、その場合の対応について、消防機関と関係者の各々の立場から考えることのできる能力を指導救命士は身につけなければならない。
到達目標	救急活動中のアクシデントにいかに対応するか、法令や活動基準に基づく、関係者（傷病者、病院、組織、報道）対応や対処方法を身につける。
ポイント	✓　救急隊長の責務を指導できる。 ✓　トラブルの発生要因と一般的な対応について指導できる。
概要	**（１）救急隊長の果たすべき役割** 救急隊長は、救急活動においては、指揮監督者、処置や手当の実施者等多岐にわたる役割を並行して行っている。さらに帰着後は、報告、記録の作成、次の出動に向けた準備を行う必要がある。 また、現場での救急活動を管理監督するだけではなく、待機勤務中においても、常に隊員への目配り気配りをして、チームワークを醸成する役目も担っている。 **（２）理想の救急隊長とは** 救急隊はチームであり、救急隊長として、リーダーシップを発揮した上で救急隊員へのよき導きを進めることが求められる。さらに、チームリーダーとして、目標に向かって作業を進めることと同時にメンバー個々の成長を図っていくことも求められる。 救急隊長は、関係者に対してのインフォームドコンセントや医療機関との連携といった外部対応も担う。 **（３）救急現場で起こっているトラブルの実際** 救急現場における救急隊員のトラブルは、医療過誤型、義務違反型、単純過誤型、交通事故型、資器材不全型、付随的業務過誤型、不適切接遇型に類型化することができる。

スキル	科目	研修科目
知識	4　救急業務の研究	救急業務と統計学

ねらい	救急統計は、テーマを設けて仮説を立て、それを裏付けるためのデータを収集して解析を行い、仮説を立証するものである。また、ここから得られた結果を基に救急活動や施策に反映させることが重要である。データを集めるということは多くの時間を要することから、実際にはやや困難な部分もあるが、身近な項目から地域の特徴や課題を見出し、施策に反映させていく努力を行っていかなければならない。
到達目標	救急活動の統計から得られるデータ等の解析方法を習得し、施策に反映することができる。
ポイント	✓　エビデンスの意味するところを理解できる。 ✓　地域の特徴や課題を統計から抽出し、救急活動や施策に反映できる。
概要	**（１）エビデンスと病院前救護活動** 科学的根拠に基づいた医療（EBM）とは、積み重ねられたデータによって担保された根拠により、新たな診断と治療の行動指針が展開され、最善の医療を行うものである。 消防隊が、病院前救護活動のプロフェッショナルであり続けるためには、指導救命士を中心に病院前救護活動における研究を進めることも必要である。 **（２）エビデンスと救急業務の関わり** 全ての救急活動は医学的根拠に基づくが、医学的根拠は積み重ねられた科学的データにより担保されており、新たなデータの蓄積により、根拠が変わることもあり得る。 指導救命士は、救急活動の知識だけではなく、新しいエビデンスが発出された時には、それらが発出された経緯を十分に理解できるだけの統計学等の知識も深めていくような姿勢が求められている。 **（３）救急統計を地域の施策に反映させる取組み** 指導救命士が中心となり、救急統計から地域の特徴や課題を抽出して考察することが望ましい。良い点はさらに伸ばし、課題は改善するための方策を考え、自らの地域のための施策を立案していくことが必要である。

スキル	科目	研修科目
技術	1　現場活動総論	救急活動技術

ねらい	指導救命士が担う技術教育に必要なものは、救急現場の状況をしっかり捉え、傷病者を適切に観察して、必要な判断と処置を行う隊員を養成することにある。そのためには、豊富な技術と隊の連携について、知識を深めておかなければならない。
到達目標	指導救命士として、特に救急現場活動に必要な技術と指導方法を身につける。
ポイント	✓　救急救命士が救急救命士を指導する必要性が指導できる。 ✓　救急現場で活動する際に必要な技術の指導方法を説明できる。 ✓　隊員間の連携や他隊との連携について指導できる。
概要	**（１）救急救命士が救急救命士を教育、指導する必要性** 多種多様な救急現場に対応するには、適時適切な活動が必要とされ、経験豊富な救急救命士が他の救急救命士に教育することが重要な要素となる。 **（２）救急救命士に必要な救急活動上の知識と技術** 知識は、常に最新のテキストに沿った内容の活動と、救急救命士として必要な資質能力が保持されるよう、継続教育や生涯学習が必要となる。また、技術については講習の受講等があるが、これらは標準的な活動マニュアルであり、更に質を向上させるには、経験豊富な救急救命士からの指導によるところが大きい。 **（３）職員間連携の重要性** 救急隊長の活動方針のもと、全隊員が同じ方向性を持ち、情報を共有し合いながら活動することが重要である。 **（４）PA 連携の必要性と各隊の活動** 救急現場で必要となる処置を現場で迅速に行うためには、消防隊による救急隊の支援活動として、PA 連携が必要である。指導救命士は連携のメリット・デメリット、連携時における各隊の役割分担を理解する必要がある。 **（５）ドクターヘリ、ドクターカー及び DMAT との連携** ドクターヘリやドクターカーなどの運用により、救急医療の専門医や看護師を救急現場に投入し、受傷から早期の治療を開始することが可能となった。また、災害派遣医療チーム DMAT との連携により、各種災害時における傷病者のトリアージ、応急治療、広域搬送を行うことができるようになっている。

スキル	科目	研修科目
技術	２　救急活動各論	基本手技の確認

ねらい	救急現場では、狭隘な場所や不安定な場所、また天候などによって活動内容が変わってくる。 しかし、救急活動は多種多様な現場から、必要な観察、処置を実施し、医療機関へ迅速に搬送しなければならない。そのためには、基本手技を習得した上で、様々な現場に対応できる応用能力を養っておかなければならない。 指導救命士として、救急隊員の基本手技技術のスキルが低下しないように、日常的に指導をしなければならない。
到達目標	救急隊員の基本手技技術を向上させるために必要な指導方法を身につける。
ポイント	✓　確実な基本手技の評価が（指導）できる。 ✓　基本手技の評価の着眼点に従って指導できる。 ✓　訓練を通じて基本手技の確認ができる。
概要	**（１）基本手技** 人工呼吸、胸骨圧迫等は救急科（救急標準課程）での手技であるが、救急隊員として確実に実施することが必要なため、その目的を再確認するとともに、評価表などを用いて手技を確認することを推奨する。 **（２）特定行為** 救急救命士は、医師の具体的指示を受け、救急救命処置を行うことができる。各手技については、確実に行えるよう日々の訓練を行うべきである。 **（３）シミュレーション訓練と評価** 救急活動には、多種多様な救急現場と傷病者に対して、傷病者の状態の把握（観察、問診等）と、確実な処置及び手技、再評価を繰り返し、活動方針をマネジメントしていくスキルが必要である。 シミュレーション訓練は、こうした救急活動のマネジメント、そのために必要な分析力、問題解決能力を磨き、活動の基本的な型を作ることやイメージ力を高めることにより、救急現場での必要な考え方を身に付けることを目的として行うものである。 訓練の評価を行う場合、学習者の意欲を引き出すことも目的とし、学習者の現場活動や学習の継続に反映されるよう、学習者本人の自己評価に基づいたフィードバックを行う。

スキル	科目	研修科目
技術	２　救急活動各論	安全管理・観察・処置

ねらい	救急現場には、多くの落とし穴が潜んでいる。それを適時的確に察知し、その対応を進めていく中で、安全で安心して活動できる現場環境を確立することが重要である。まずは、危機管理の観点から、現場を見る目を養うことが必要であり、「何か変？」という感性を身に付け、それを磨くことが求められる。安全で安心して活動できる現場環境の確立は、その根底にあるものであり、隊員や組織を守るためにも重要なものである。 所属の救急隊員等に対して、安全な環境の中での観察・処置のポイントを指導することが指導救命士には必要である。
到達目標	救急現場活動に必要な安全管理、観察、処置技術に関する評価方法を身に付ける
ポイント	✓　危険予知能力について指導できる。 ✓　現場の安全管理について、事例に基いた対応を指導できる。 ✓　観察と処置の評価のポイントについて指導できる。
概要	**（１）各種マニュアル（プロトコル・要領・ガイドライン等）の意義** 水準の担保、適切な業務実施といった観点から「想定内」への適切な対処方法を定めたマニュアルは重要である。他方で、マニュアル化の限界を認識し、問題意識を持ち、「想定外」の数を極限まで減らすことも重要である。 **（２）トラブル症例の分析方法** 消防本部や救急隊が経験した事象を様々な視点から分析し、分析結果から見出された対処方法を活用することにより、救急業務を中断することなく対応できるようになる。 **（３）トラブル発生時の心理状況** 想定外の事象に対応できるように、様々な取り組みにより、パニック等の心理状況に陥った際のリカバリー方法について、事前教育を行う必要がある。 **（４）危険予知訓練（KYT）手法の活用** 危険予知訓練を訓練に応用することで、各種手技・観察能力などの向上を図ると同時に、危険性を正しく認識できる感受性を高めることができる。 **（５）指導救命士として** 医療事故防止策や消防組織の安全管理手法のみではなく、他業務の指導育成手法や安全管理手法等にも興味を持ち、知見を広げる努力が必要である。 **（６）サマリーを用いた処置観察要領** 的確な環境把握、観察、病態把握と、それに基づいた処置等の判断を日常的に行えるトレーニングの手法の一つとしてサマリーがある。

スキル	科目	研修科目
技術	２　救急活動各論	接遇要領

ねらい	救急業務を円滑に行うには、救急救命処置の技能だけを学習するのでは十分とはいえない。救急隊員は、傷病者と傷病者に関わるすべての人たちの不安と期待について、常に関心を示すとともに、さらに、救急現場や医療機関において関わりを持つ人たちにも十分な気配りが必要である。 指導救命士は、救急活動においてトラブルを少しでも減少させるとともに、正しい接遇要領を身に付け、指導できなければならない。
到達目標	救急業務に必要な接遇要領の実践方法を身に付ける。
ポイント	✓　救急現場における接遇の必要性が指導できる。 ✓　救急活動時の適切な対応（接遇）要領が指導できる。 ✓　トラブル事例とその対応策について議論を展開できる。
概要	**（１）接遇とは** 　接遇とは、接した相手の満足度を上げるために行うスキルである。救急現場では、傷病者や関係者などに対して「思いやる気持ちを持って対応する」意味合いを持つ。また、接遇の評価は受け手によるため、救急隊の態度や言葉遣い以外にも、清潔感や身だしなみなどといった様々な観点から、日常的に意識する必要がある。 **（２）救急現場における接遇の必要性** 　救急車を要請する者にとって、救急車を呼ぶに至った出来事は、非日常な現実である。また、自分自身あるいは家族などの容態に大きな不安を感じ、心身共に対する「適切な処置」や「迅速な医療機関への搬送」を期待している。一部の隊員による言動や態度が不適切であるというだけで、これらの期待を裏切り、救急業務への不信感を抱かせることになってはならない。 **（３）非言語コミュニケーション** 　言葉だけではなく、自分では無意識に行っている態度や行動も評価されており、非言語コミュニケーションを意識した活動が求められる。 **（４）コミュニケーションの基本動作** 　「相手をよく見て対応する」「相手の話に耳を傾ける、最後まで聴く」「救急搬送に安堵感を与える」といった点に注意する必要がある。 **（５）救急活動時における言動の注意点** 　コミュニケーションを崩壊させる原因の一つに自分の判断を相手に押しつけることがある。また、老若、視聴覚障がい、あるいは傷病の発生による心理的動揺など、救急隊に対する反応は様々であり、相手をよく見極めて理解できるように話さなければならない。

スキル	科目	研修科目
技術	２　救急活動各論	救急現場学（経験的知識・技能・対応）の構築

ねらい	救急救命士の資格を有し救急業務に精通した救急隊員が、的確な観察力、判断力により、救急現場で培った多種多様な経験を活かし、病院前救護において救急隊の役割と意義を明確にし、救急隊員の視点から救急現場活動のノウハウを伝承することにより、「救急現場学」を構築する。
到達目標	救急隊員として救急現場等で培った技術（現場学）を、医師の担保のもとに学術的なカリキュラムとしてまとめることができる。
ポイント	✓救急活動の現場の特殊性を指導できる。 ✓病院前救護の専門職としての自立と自律を指導できる。
概要	**（１）現場活動の視点から** 救急現場は特殊性のある場所であり、消防機関はその環境に対応できる能力を身に付けた専門集団である。故に、救急活動特有の現場学が存在する。 **（２）安全管理の視点から** 現場活動には危険が伴うため、安全管理の観点から現場を見る視点が必要となる。指導救命士が病院前救護の専門職として、経験の中で修得したものを指導していくことが大切であり、隊員相互の信頼関係にもつながる。 **（３）関係機関等との連携の視点から** 救急現場では、多くの関係機関との連携が必要であり、また、救急活動には情報が必須である。救急現場における連携のあり方や情報を得るためのスキルは救急現場活動に特有のものである。 **（４）現場を活動しやすい場へ変えるスキル** 救急現場で処置を行うかの判断を含め、救急隊員は、救急現場の特殊性の中で、救命処置をする場の選定には高いスキルを持っている。 **（５）傷病者との関係** 多様な救急現場の環境のもと、初対面の傷病者と傷病者の精神状態も考えながら進めていく活動には、特殊性がある。 **（６）自主性と自律性（病院前救護の専門職として）** 救急救命士は、ミニドクターではない。病院前救護の専門職として、自主性と自律性をもって業務を行ってこそ、その能力が評価される。 **（７）制限された時間と救命処置** 救急隊の活動は、多様な現場環境の中で、どれだけ救命処置に時間を割けるかが重要であり、このことは、救急隊員だからこそ成し得ることである。

スキル	科目	研修科目
指導	1　教育概論	成人教育法

ねらい	指導救命士として、救急隊員の知識、技術等といった能力を引き出し、それを伸ばすための教育技法を理論的に理解し習得する。そして、学習者本人に、その職業能力向上のための生涯学習に積極的に取り組む意識づけをするとともに、生涯学習が可能な職場環境整備も指導救命士の役割であることを理解し、そのための方策を知る。
到達目標	救急隊員に対し、専門的知識、技術のスキルアップを促し支援する方法を習得し、指導することができる。
ポイント	✓　救急隊員の知識、技術を向上させるための効果的な指導方法の理念を指導できる。 ✓　救急隊員のスキルアップを目的とした、効果的なトレーニングシナリオの作成に関して指導できる。 ✓　積極的な生涯学習に向けた取り組みがサポートできる。
概要	**（１）指導理念** 指導の目的は、対象者の能力、行動、特性を引き出すことにある。活動事案、症例検討、訓練計画、訓練という学習のステップを充実させ、そのサイクルを確実に回せるようにサポートするとともに、学習の原動力となる信念（思い、つながり）の醸成にも配慮した支援・育成をすることが求められる **（２）指導の進め方** まず、学習者が身につけるべき知識や技術に対し、どの程度の力量を持っているか評価を行う。その上で、評価に基づき、少し頑張れば届くレベルで具体的な指導目標を設定する。また、指導においては振り返り（デブリーフィング）を適宜実施する。 **（３）トレーニングシナリオの作成** シナリオトレーニングは、実経験の少ない者が、経験したことのない事態等に遭遇した場合、一定の対応ができるように、事前に段階的に疑似体験をさせ、知識を行動につなげることを目的とする。シナリオ作成に当たっては、現場活動の要素である観察、判断、処置及び伝達要領のうち、どの部分を主眼とし、どのレベルまで、いくつ指導するのかを学習者のレベルに合わせて考える必要がある。 **（４）積極的な生涯学習のための環境作り** 指導救命士として、直接的な指導に加え、学習者自らによる継続した学習の実現、学ぶ力を引き出すための各場面に応じたサポートの日常的な実施といったことにより学習者の生涯学習を促進することも重要である。

スキル	科目	研修科目
指導	教育技法	評価技法

ねらい	学習者への評価のあり方について、意味のある、より効果的なアプローチが必要であることを理解し、それを実践するための手法を学ぶ。
到達目標	シナリオトレーニング等を通じ、展示、説明、評価方法を習得し、指導することができる。
ポイント	✓　評価のポイントを明確化し、評価（方法を指導）できる。 ✓　シナリオトレーニングの留意点を指導できる。 ✓　効果的なフィードバックを活用した評価（方法を指導）できる。
概要	**（１）主眼の明確化** 評価に当たっては、トレーニングシナリオに設定した目標について、具体的にどこに着目するかといった主眼を明確にしておく必要がある。これが明確でないと、評価の内容も漫然としたものとなってしまい、学習者へのフィードバックが不十分となり、トレーニングの意味をなさなくなる。 また、指導者は、具体的かつ詳細に、評価項目を整理する必要がある。 **（２）シナリオトレーニングによる評価** シナリオトレーニングの多くは、整備された環境の中で、違う空間を想定して実施されることから、想定した救急現場を十分にイメージすることができる情報を、訓練実施者に与える必要がある。この際、口頭による提示のタイミングや測定値や症状の変化を工夫することで、より効果的な学習につなげることができる。 評価にあたっては、実施したシナリオトレーニングの目標、目的、主眼とした事項を、学習者に明確に伝えなくてはならない。また、なぜそこを主眼としたか、どこをポイントとして着眼したかを伝えることで、学習者は何を評価されているのかが理解でき、具体的な議論により具体的な課題を明確にするといった、より有効なフィードバックにつながる。 シナリオトレーニング後は、なるべく早く活動の振り返りをし、フィードバックをすることが重要である。

スキル	科目	研修科目
指導	２　教育技法	コミュニケーション技法

ねらい	指導は、学習者に指導者の意図が伝わり、学習者の意識、行動の変容に繋がらなければ意味がない。同じような評価を行っても、その伝え方により効果が大きく変わることを理解し、指導上で必要となるコミュニケーション技法を習得する。
到達目標	指導に必要なコミュニケーション技法について習得し、実践することができる。
ポイント	✓　学習者の特性を尊重し、学習効果を導き出させることができるコミュニケーションの中で指導を展開できる。 ✓　対象者に合ったコミュニケーション技法について、具体的な事例を用いて指導できる。
概要	**（１）訓練指導時等におけるコミュニケーション** 指導者のコミュニケーション能力の違いにより、学習者の行動変容が効果的に行われるか、全く効果を得られないか、ともすれば逆効果になる可能性もあり、「伝え方」に注意して指導をする必要がある。 指導者は、学習者の考えや意見にしっかりと耳を傾け、共感できる部分については共感し、信頼関係を築いた上で、改善点を明らかにしていく必要がある。また、救急活動を指導する以上学習者が指導内容を受け入れられるためには、医学的根拠に基づき客観的な説得力を指導内容にもたせる必要がある。 また、指導の際に、指導者が一方的に答えを示すことは容易いが、それでは学習者の指導という面では効果が薄い。学習者が、自らの気付きにより考えを定着させ、さらに、自らの学ぶ姿勢を促していくべきである。 **（２）日常業務におけるコミュニケーション** 指導は訓練時のみならず、実際の救急活動を含めた日常的な業務においても実施されるべきものである。日常業務における評価は、訓練と同様、設定された指導目標に対し、要素別に具体的な評価項目を明確にし、常にその項目を把握しておく必要がある。 **（３）対象者に合ったコミュニケーション** 新任者に対しては、必要な知識を指導する、具体的なやり方を指導するといったティーチングが指導の主となる。経験が豊富であり、具体的な知識を既に持っている先輩部下に対しては、質問や対話により、本人の中にある答えを引き出すコーチングが指導の柱となる。

スキル	科目	研修科目
指導	２　教育技法	プレゼンテーション技法

ねらい	プレゼンテーションで用いる資料は、分かり易く、伝わり易いものでなくてはならない。指導救命士として、効果的なプレゼンテーション資料の作成方法を習得し、説得力、到達力を育みながら、どのようにプレゼンテーション技法を学ぶかを指導できなくてはならない。
到達目標	自分の考えや研究の成果等を理解しやすいように示す方法を習得し、指導することができる。
ポイント	✓　説得力のあるプレゼンテーション資料の作成（方法が指導）ができる。 ✓　視覚化による効果と注意点を理解し、講義を視覚化（させる方法を指導）できる。
概要	**（１）効果的な資料の作成方法** プレゼンテーションに用いる資料は、正確なデータにより客観的とするだけでなく、プレゼンテーションの対象とする者の知識レベルや経験年数、説得する内容について賛成であるか否かといった対象者の属性にも合わせて作成するべきである。 **（２）視覚化による効果** 言葉と図を併用することで、一見して内容が分かることにより、イメージ形成ができ、相手に強い印象を与えることができる。図の作成に当たっては様々な図解のパターンがあるが、表現手段としての特徴を踏まえつつ、選択する必要がある。 また、視覚化しプレゼンテーションするための機器等には複数の選択肢があり、どのような機器を使用するかは、利用上の観点と、資料制作上の観点から選択すべきである。 **（３）視覚化の注意点** 単に視覚的資料を用いるだけでは、効果的なプレゼンテーションとは言えないことは注意が必要である。視覚的資料は、プレゼンテーションの内容のイメージを形成することに有効であるが、詳細なデータ等の伝達には不向きであり、また、イメージだけを受け取られてしまえば、錯覚や誤解を生む危険性も高まることとなる。 また、著作権、使用許可、プライバシー保護の観点にも注意が必要である。

スキル	科目	研修科目
指導	2　教育技法	事例提示技法

ねらい	指摘する、教え込むといった方法だけが指導ではなく、また、褒めるだけという方法も学習効果が得られ難い。指導救命士として評価の内容を整理し、学習者の成長を促す事例提示の方法の修得が必要であり、そのためには根拠を明示することが重要であることも理解をしておく必要がある。
到達目標	正しいことへの評価と改善を目的とした評価について、指導することができる。
ポイント	✓　事例提示を通じて、評価内容の整理とその根拠について指導できる。 ✓　正しいことへの評価と改善を目的とした評価について、その手法が指導できる。
概要	**（１）事例提示の意義** 事例提示は、具体的事実である事例をきっかけに、学習者の変容を促すために実施するものであり、悪い点の改善だけでなく、良い点の称賛も含まれる。事例提示における評価も、自らに気付かせる指導方法であるが、実際に自分が経験した事例や、他者が実際に経験した事例に基づく分、より具体的かつ明確に、その評価が学習者に反映される。 **（２）事例提示の具体的手法** 対応に苦慮した事例や課題が残った事例を取り上げ、今後同じ課題を発生させないということを目的とした振り返りは必要であるが、課題や改善点を振り返るばかりでなく、正しいことや奏功事例を振り返ることによるポジティブフィードバックも、積極的に取り入れるべきである。 定めた目標に到達しない場合でも、よくできた点について、しっかりと褒めることが必要であり、褒めることで仕事を楽しみ、学ぶ力が育まれる。 事例提示における改善目的の評価手法は、なるべく自分の言葉で振り返らせ、どこを改善し、そのためには何を見、何を考えるべきか、自らで気付かせるよう、質問で誘導するという形が基本となる。

スキル	科目	研修科目
連携	1　救急救命士の再教育	症例検討会の計画と運営

ねらい	病院前救護の充実と強化には、救急隊員、救急救命士の資質の向上が必要不可欠であることから、その方策のひとつとして、指導救命士は、医療機関や指導医師等と連携して、症例検討会を開催するために必要な能力を身に付けておかなければならない。
到達目標	医師を招聘した検討会の計画から開催に至るまでの手順を身につける。
ポイント	✓　症例検討会の効果を理解し、説明できる。 ✓　症例検討会を企画・立案・運営できる。 ✓　症例検討会を円滑に進行させることができる。
概要	**（１）救急隊員にとっての症例検討会とは** 救急活動は、１つの症例に関わることのできる期間が短いという特性を持つため、症例検討会が重要である。指導救命士が症例検討会を企画するときには、まず、日常の活動の中でどのような症例を検討することが必要かを見極め、それをどのように提示し意見を求めていくかを考えなければいけない。 症例検討においては、指導救命士のみでは医学的観点からの意見に限界があるため、医療関係者の参加が必要である。また、医療関係者の参加は、地域医療における顔の見える関係の構築につながる。 **（２）症例検討会の計画** 症例検討会の計画に当たっては、運営担当や参加者の検討といった「ひと」、会場の確保や資機材の準備といった「もの」、施設使用料や報償費等の「かね」の三要素の検討を進める必要がある。 また、症例検討会で取り上げる症例や講義等を検討する際には、地域メディカルコントロール協議会の指導医師と緊密に連携をとり、進める必要がある。 **（３）症例検討会の運営** 計画に基づき開催要領を作成する等準備を進める。また、指導救命士の関わり方は事務局、進行役、アドバイザー等多様な形態が想定されるが、いずれにしても、指導救命士として症例検討会の円滑な運営と目的の達成を目指すべきである。

スキル	科目	研修科目
連携	1　救急救命士の再教育	対象者の習熟度に合わせた病院実習カリキュラムの計画

ねらい	再教育を担当する指導救命士として、個々の救急救命士の技量や経験、モチベーションについて再教育に活かすことが求められる。ここでは、医療機関や指導医師等との連携を通じて、個々に習熟度の違う救急救命士の病院実習を、効果的に進めるためのカリキュラムの作成手法等について、身に付ける。
到達目標	病院実習対象者の技量や経験を把握し、最も適した病院実習カリキュラムを作成し、消防組織と受入れ医療機関における調整方法等を身につける。
ポイント	✓　病院実習の必要性を理解し、説明できる。 ✓　病院実習対象者の習熟度を把握できる。 ✓　受入れ医療機関、指導医師等と効果的な病院実習について調整することができる。 ✓　病院実習対象者の個々の習熟度を反映させた病院実習カリキュラムを作成できる。
概要	**（１）救急救命士の習熟度の把握方法** 訓練や現場活動を通じて、習熟度を把握することができる。基本訓練は、基本的な知識や技術の正確度を、想定訓練は知識や技術の応用力を把握することに適している。また、経験を１つの貴重な症例として大切に積み重ねているかを把握することで、現場活動による習熟度を把握することができる。 **（２）医療機関との連携** 病院実習を円滑かつ効果的に進めるためには、医療機関との綿密な連携が不可欠である。連携医療機関に関する基礎情報を事前に把握した上で、医療機関や指導医師と実習のカリキュラムや実習の進め方について十分に調整する必要がある。また、病院実習は全てスタッフの協力のもと成り立っているため、指導医師以外の病院のスタッフとも連携する必要がある。 **（３）病院実習カリキュラムの作成方法** 限られた時間を有効に活用し効果をあげるためには、各々の時限の目的や実習内容を整理したカリキュラムの作成は不可欠である。 医療機関、指導医師、関係スタッフと調整しながら、個々の救急救命士に適したカリキュラムを作成する必要がある。

スキル	科目	研修科目
連携	1　救急救命士の再教育	実践技能コースの計画と連携

ねらい	救急隊員、救急救命士に、実践的な技能を修得させるためには、医師と連携して医学的な監修を受けたシミュレーション訓練（実践技能コース）が有効である。指導救命士は、救急救命士の経験やレベルに応じた教育を展開するための能力を身に付けておかなければならない。
到達目標	医師による医学的な監修を受けられる環境のもとに、シミュレーション訓練（実践技能コース等）を計画する方法を身につける。
ポイント	✓　実践技能コースの重要性を理解し、説明できる。 ✓　医師と連携（医学的な監修）した教育コースを企画・立案、運営できる。 ✓　自己啓発の必要性を説明できる。
概要	**（１）実践技能コース** 実践技能コースとは、実践的かつ総合的な技能を修得する目的で実施される教育の一つである。実践技能コースにおいては医学的な監修が必須であり、指導救命士は医師と連携して、計画を立案する必要がある。 例えば、医師や指導救命士の救急車同乗訓練、シミュレーション訓練等があるが、いずれにしても地域の実情を踏まえ、地域で実施可能な実践コースの構築を目指さなければならない。 **（２）医師との連携** 実践的な技能指導を行うには、メディカルコントロールに携わる医師との連携が重要であり、実施可能な方法の協議を行い、病院前救護の質の向上につながる教育を実施していかなければならない。また、医師に医学的観点から改善点等を指導してもらうことで、救急隊のモチベーション向上につながる。 **（３）自己啓発** 医学、医療の進歩に伴い、救急隊員に求められる知識、技術についても高度化、複雑化が進んでおり、医療に携わる者としての救急隊員は、救急事例発表会や各種シンポジウム等への参加や学会団体による実践技能コースへの参加等を通じ、常に自己研鑽に努めていかなければならない。 指導救命士には、指導にあたる救急隊員、救急救命士に自己研鑽の必要性とその方法について伝え、それを継続的に実践させる役割が求められる。そのためにも本人自らの自己研鑽を欠かすことができない。

スキル	科目	研修科目
連携	1　救急救命士の再教育	集中講義の計画と連携

ねらい	救急救命士個々の現場経験（実績）は様々で、経験のない症例や疾患、苦慮した症例、苦手な病態や手技等に対する教育を行う必要がある。 その方策として集中講義があり、指導救命士には、メディカルコントロールに携わる医師との連携を密にして計画を立案し、集中講義を実践する役目がある。
到達目標	救急救命士（救急隊員）個々の活動実績に照らし合わせて、不足部分や自己研鑽が必要な項目を医師と連携して指導する方法を身につける。
ポイント	✓　個々の救急救命士の評価と救急活動のフィードバックができる。 ✓　救急救命士の技量等を反映した集中講義が計画できる。
概要	**（１）評価・フィードバック** 集中講義は、救急救命士の経験やレベルに応じた内容で計画していくことが必要になるので、指導救命士は、その経験等の情報を収集しておく必要がある。 現場活動や訓練等を通じて、救急救命士の経験を把握するための方法を整えておく必要がある。救急現場での経験や救急救命士としての活動経験、特定行為の実施回数等により医学的知識や技術がどの程度であるのかを把握することができる。 また、新しい知識や技術については経験だけでは把握できないため、アンケートの活用等現場活動や訓練以外の方法の活用も必要である。 個々の知識や技術を評価した後、それらを反映させた再教育を展開し、教育後のフィードバックを実施する。 **（２）メディカルコントロールとの連携** 救急救命士の再教育には医学的担保が不可欠であり、指導救命士は地域メディカルコントロール協議会と常に緊密な関係を保ち、個々の救急救命士の能力に関する情報等を提供し、それを十分に理解してもらった上で集中講義の内容を検討、実施する必要がある。 また、集中講義開催後は、記録を残しておくことが望ましい。講義の終わりにアンケート調査をする等し、参加者の意見を取りまとめて、以降の集中講義に活かすことが大切である。

スキル	科目	研修科目
連携	2　救急活動事後検証	救急活動事後検証のあり方（検証結果とフィードバック）

ねらい	メディカルコントロールの構成要素の中に「事後検証」があり、救急活動の品質管理システム（PDCA サイクル）により検証・評価が行われている。この「事後検証」を地域のメディカルコントロール協議会と連携して、地域の実情に応じた事後検証システムを指導救命士は構築しなければならない。
到達目標	救急活動における PDCA サイクルを用いた事後検証の必要性を身につけ、事後検証結果をチームとして、または資格や任務に応じて伝達、指導することができる。
ポイント	✓　地域の実情に応じた事後検証のあり方を説明した事後検証要領を作成できる。 ✓　資格や任務に応じた指導を良好な人間関係の中で実践できる。
概要	**（１）PDCA サイクル** 救急活動に関するメディカルコントロールの一連の作業では、プロトコルの作成や教育（Plan）、実際の現場活動や医師の指示、指導、助言（Do）、事後検証（Check）、フィードバックと再教育（Act）といった、継続的な品質管理と品質改善が行われている。 指導救命士は、この事後検証システムの構築の中心として、検証医療機関との連携や関係機関との調整に努める役割がある。 **（２）事後検証の実際** 事後検証を行うためには、医療機関と消防本部との連携が必要不可欠である。病院前救護の質の向上で重要な役割を担う検証医師は、救急隊員が行った救急活動について、医学的な観点から評価を行い、フィードバックを行う。 また、救急隊はプロトコルに基づいた医行為を行うとともに、正確な記録を残す。指導救命士は、救急隊の活動を消防の観点から検証・評価し、フィードバックを行う。 **（３）検証結果のフィードバック（伝達・指導）** 事後検証で最も重要なのは、検証結果のフィードバックである。 フィードバックは、検証医師の立場として医学的観点からの指導であったり、指導救命士が救急業務のリーダーとして、検証結果を伝達・指導したりする。消防と医療の連携が円滑に進むことで、救急活動の質の向上、すなわち地域の病院前救護の質の向上につながっていくのである。